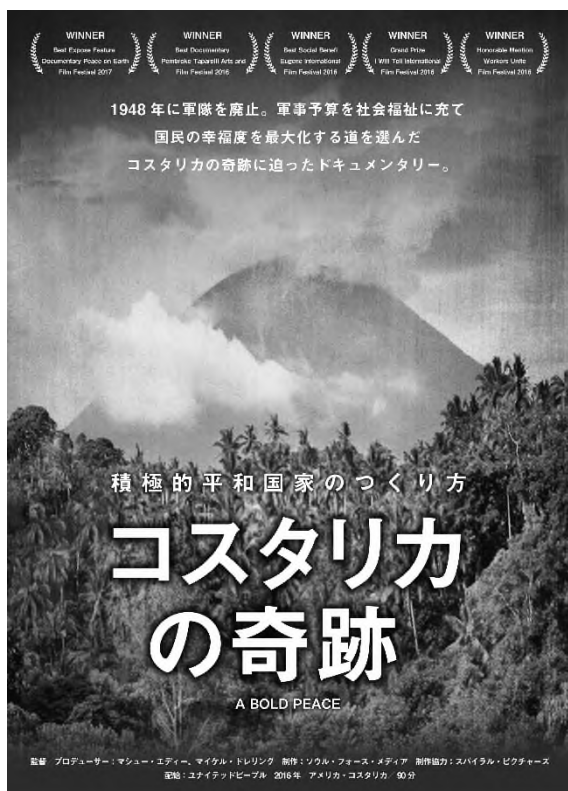


プレス資料

映画『コスタリカの奇跡 ～積極的平和国家のつくり方～』



1948年に軍隊を廃止。軍事予算を社会福祉に充て、国民の幸福度を最大化する道を選んだコスタリカの奇跡に迫ったドキュメンタリー

世界には軍隊なしで国の平和を保ってきた国々がある。そんな数少ない国の一つで、1948年に常備軍を解体した国がコスタリカだ。コスタリカは軍事予算をゼロにしたことで、無料の教育や国民皆保険制度を実現し、環境のために国家予算を振り分けてきた。その結果、地球の健全性や人々の幸福度、そして健康を図る指標「地球幸福度指数（HPI）」2016の世界ランキングにおいて140ヶ国中で世界一に輝いているのがコスタリカである。またラテンアメリカで最も安全とされている国でもある。

『コスタリカの奇跡 ～積極的平和国家のつくり方～』は、1948年から1949年にかけて行われた軍隊廃止の流れを追いながら、コスタリカが教育、医療、環境にどのように投資して行ったのかを詳しく説明する。アメリカでは公的債務、医療、そして軍事費が日増しに増大していったこととは対照的だ。この映画は軍隊廃止を宣言したホセ・フィゲーレス・フェレールや、ノーベル平和賞を受賞したオスカル・アリアス・サンチェスなどの元大統領や、ジャーナリストや学者などが登場する。世界がモデルにすべき中米コスタリカの壮大で意欲的な国家建設プロジェクトが今明らかになる。

監督：マシュー・エディー、マイケル・ドレリング

プロデューサー：マシュー・エディー、マイケル・ドレリング

制作：ソウル・フォース・メディア 制作協力：スパイラル・ピクチャーズ

出演：ホセ・フィゲーレス・フェレール、オスカル・アリアス・サンチェス、ルイス・ギジェルモ・ソリス、クリスティアーナ・フィゲーレス他

配給：ユナイテッドピープル

2016年／アメリカ・コスタリカ／90分・57分

映画概要



1953年、アメリカのアイゼンハワー大統領（当時）は、軍産複合体を批判する有名な演説「鉄の十字架」別名「平和に機会を」で「世界は別の道を選ぶことはできないのだろうか？」と問いかけた。今日のコスタリカに、その「別の道」を見いだすことができる。

コスタリカは1948年に常備軍を撤廃。1949年には憲法にも規定された。以来、軍隊に頼らず、条約や国際法、そして国際機関との関係を強化しながら国際的な関係性の中で独自の安全保障体制を構築していった。

莫大な予算が必要となる軍事費の支払いから開放されたコスタリカは、この予算をよりよい教育や国民皆保険制度の実現のために振り分けてきた。1948年12月1日に軍隊廃止を宣言したホセ・フィゲーレス・フェレールの「兵士よりも多くの教師を」というスローガンは有名だ。

このように、コスタリカは国際的な連帯や国際法を基にした平和国家建設への道を決断し、70年近く常備軍を持つことなく平和を維持し、繁栄してきたのだ。本作は、コスタリカを根底から揺るがした1948年の内戦の頃から軍隊廃止までの道筋を紹介する。コスタリカはこれまでの数十年で幾つかの重大な危機を乗り越えてきた。しかし、現在直面する危機が最も手強いものかもしれない。

第1章：別の道をゆく

コスタリカが「地球幸福度指数(HPI)」2016の世界ランキングで世界一に輝く理由に迫る。軍隊を廃止したコスタリカの人々の平和観とは？「プラ・ヴィダ」(美しい人生)と挨拶するコスタリカ人の生きる平和な国家はどのようなものになっているのだろうか？

第2章：軍の撤廃



1940年代前半、カトリック教会と、労働運動のリーダーたち、そしてカルデロン政権がまれな連帯を見せ、強固な福祉国家の基礎作りのための大胆な改革を行った。

その後、政治腐敗と不正選挙が原因で、コスタリカは1948年に内戦に陥る。この内戦に勝利を取めたホセ・フィゲーレス・フェレールは、一躍国民の注目を集める存在となり、実践的かつ理想的な軍隊を廃止するという決定を下すこととなる。

彼はトルストイ、エマーソンの他、数多くの平和主義者の著書を読み漁る勉強家だった。民主主義を重んじ、確固たるものにするために、ホセ・フィゲーレス・フェレールは「国民解放軍」のリーダーとして、権力を手放すことになる。

第3章：新たな課題



コスタリカの平和国家モデルは何度か試されることとなる。1980年代には中米の国々は内戦に直面し、アメリカのレーガン政権から猛烈な外交圧力を受ける。冷戦が激化するなか、ルイス・アルベルト・モンヘ大統領（当時）の中立宣言や、オスカル・アリアス・サンチェス大統領（当時）の平和交渉は、コスタリカの平和を維持するための大胆な行動だった。

アメリカ主導で戦われたイラク戦争でコスタリカは“有志連合”に加わったが、草の根レベルの努力により、そのリストから外れたということもあった。

2010年にはニカラグア軍がコスタリカ領土の一部を占領するというショッキングな挑発行為が行われた。ニカラグアは撤退するどころか、国境地帯に配備する軍隊の数を倍増させたのであった。コスタリカはこの危機を米州機構と国際司法裁判所に冷静に訴えるに留めて乗り切ることになる。このケースは国際法と外交において重大な事例研究となった。

第4章：コスタリカの国家安全保障モデル

コスタリカとアメリカの専門家が軍隊なくして平和を維持してきたコスタリカの安全保障モデルを振り返る。オスカル・アリアス・サンチェス元大統領はそのコスタリカモデルを近隣諸国に輸出した。パナマやハイチの非武装化にアリアスは大きく貢献している。

第5章：脅かされる平和



コスタリカはユートピアではない。自由貿易協定など新自由主義的な経済の動きによりグローバル化が進み、格差が拡大している。その結果、コスタリカの連帯ある社会民主主義の伝統が揺らいでいる。

第6章：永久戦争国家

格差と国際化が社会民主主義を脅かす中、コスタリカの平和を脅かす存在が再び現れる。麻薬戦争を行うアメリカだ。麻薬取引は深刻な問題。コスタリカはラテンアメリカの麻薬生産地帯コロンビアと、世界最大の麻薬市場アメリカという2つの地域に挟まれ、麻薬戦争のためにアメリカ軍駐留問題が発生する。

しかし同じアメリカ大陸に存在しながらも、コスタリカはアメリカが軍産複合体を主体とした戦争経済によって多大な代償を払っていることは対比的に、平和国家として存在し続けている。アメリカは世界一の武器取引国だが、コスタリカのオスカル・アリアス・サンチェス元大統領は、世界の平和を前進させるため、武器貿易条約（ATT）の締結を世界各国に勧めている。

映画監督プロフィール

マシュー・エディー (Matthew Eddy)

監督／プロデューサー／脚本

サザン・ユタ大学の社会学の准教授で2児の父。オレゴン大学で社会学の博士課程を2013年に卒業。博士論文では数章を割いてコスタリカの歴史や非暴力的なコスタリカ人の国民性についての調査結果を書いている。映画『コスタリカの奇跡 ～積極的平和国家のつくり方～』の撮影のために3年の夏を費やし、データ収集やインタビューを敢行した。本作が彼の初作品となる。彼は人権オブザーバーとしてメキシコのチアパス州やイスラエル・パレスチナにおいて非暴力抵抗運動に参加した経験を持つ。このような非暴力抵抗運動や国際人権 NGO について幾つかの記事を執筆している。



マイケル・ドレリング (Michael Dreiling)

共同監督／プロデューサー

オレゴン大学の社会学の教授で3児の父。政治や環境社会学、国際貿易政策、平和学の学術的な専門性に加え、1995年にデトロイトで起きた新聞ストライキ（報道を止めさせる）における活動家に迫ったドキュメンタリーをプロデュースした経験を持つ。またケーブルテレビのパブリック・アクセス権についての貢献を多数している。2冊の本の著者であり、多数の論文の執筆者でもある。大学で優秀な教授として表彰されたことのある彼は、非営利活動として非暴力運動や次世代のための環境保全活動、そしてフェアな経済活動について活動している。映画『コスタリカの奇跡 ～積極的平和国家のつくり方～』は正に子孫によりよい社会を届けるための映画となっている。



マシュー・エディー監督 Q&A

Q.なぜ今コスタリカを主題にした映画を制作したのですか？

世界でも有数の危険地帯にありながら、コスタリカは軍隊を放棄して 68 年（2016 年現在）になります。コスタリカの外交力や非暴力による紛争解決の歴史から、他の小国や私の出身国である世界最大の軍事力をもつ米国も、大いに学ぶところがあります。

『コスタリカの奇跡』では、非武装化によっていかに多くの中間層を生み出したのかについても明らかにします。

近隣の武装中米国家と異なり、コスタリカは軍隊を撤廃したことにより多くの予算を教育や医療に投資することができました。先の米国大統領選挙の際に、自称民主社会主義者のバーニー・サンダース候補に関心を寄せていた米国人達は全員、この映画を見るべきです。彼は演説やインタビュー中でよく、社会福祉プログラムの進歩は北欧の社会民主主義によってもたらされたと述べていますが、本作では、社会民主主義のモデルを中米の国、コスタリカに見ることができます。

コスタリカの社会民主主義が、50 年以上に渡りいかに大学までの無償教育や社会保障、国民皆保険の確固たる制度を築いてきたかが分かります。サンダース氏への批判で多いのは、「米国は北欧ではない」という意見ですが、それを言うなら、中米も、北欧ではありませんね。北欧と違い、コスタリカは小国ではありますが、社会民主主義によって良い教育を受ける機会や国民皆保険制度が整備され、人々は豊かな暮らしを手に入れました。さらに、コスタリカの平均寿命は米国よりも長いのです。

Q.『コスタリカの奇跡』制作プロジェクトはどうして始まったのですか？

博士論文のために研究を行っている時、いくつかの国際的な世論調査で、コスタリカが平和的な国家として常に上位に位置づけられているということに気づいたのです。興味を持った私は、コスタリカに赴き、調査を始めることにしました。コスタリカは特殊なプロセスを経て 1948 年に軍隊を撤廃したので、大変興味深い事例だと感じていました。私は非武装化がどの程度政治的な衝突や戦争、人々の日常の些細ないざこざの解決に対する思考や言動に影響を与えているかを知りたかったのです。コスタリカ人の 91%は、軍隊を復活させるようないかなる試みにも反対すると言っています。軍隊を持たないことが国民の総意であると言えるでしょう。

また、コスタリカ大学の学生は52項目中48の態度や行動に関する指標において、米国オレゴン大学の学生よりも平和的な姿勢を示していることが分かりました。当然、オレゴン大学の学生は米国の他の大学生と比べてリベラルだとみなされていることにも留意しなければなりません。私はコスタリカの歴史を知れば知るほど、説得力のあるドキュメンタリー映画を作れるだろうと確信しました。

2年後、有り難いことにポートランドのジュビッツファミリー基金より援助をいただき、マイケル・ドレリングとティール・グレイハヴェンズと共にコスタリカに戻り、撮影を開始することができました。2人は多様な才能の持ち主で、過去に映画制作の経験がありましたし、プロジェクトの成功に欠かせない協調性を持ち合わせていました。またとても幸運なことに、この映画プロジェクトはコスタリカの人々に好意的に受け入れられ、喜んで米国の聴衆のために経験を話してくれました。

Q.このドキュメンタリーに主人公はいますか？

映画に登場するある人物が「コスタリカの市民が本当の主人公だ」と言いました。過去数十年、紛争や衝突を国際法や外交、非暴力の行使によって解決し続けたという市民の自負は、コスタリカの歴史の流れに大きな影響を与えています。『コスタリカの奇跡』で最も伝えたいことは、コスタリカの人々の歴史と平和精神、平和に対する彼らの奮闘の記録です。

”ヒーロー像”と言うならば、米国ではほぼ無名ですが、ホセ・フィゲーレス・フェレー元コスタリカ大統領は中米で最も興味深い指導者であると言っても過言ではないでしょう。ホセ・フィゲーレスは、コスタリカのジョージ・ワシントン、エイブラハム・リンカーン、トマス・ジェファーソンであり、彼らを足して割ったような人物です。少しだけ例を挙げると、彼は勝利を納めた指導者であっただけではなく、女性とアフリカ系カリブ人の投票権を認めた政治家でもありました。

また、コスタリカにはフィゲーレスの他にも素晴らしい指導者に恵まれています。オスカル・アリアス元大統領やアルベルト・モンヘ元大統領は1980年代の中米の血なまぐさい戦闘にコスタリカが巻き込まれないよう、重要な役割を果たしました。アルベルト・モンヘの功績については、米国のレーガン元大統領からコスタリカを米軍の秘密基地として利用されそうになった際、部分的に米国の圧力に屈服した点もあり、評価が分かれます。しかしながら、モンヘは中立を宣言し、コスタリカの非暴力による安全保障政策の前進を確固たるものにしました。

オスカル・アリアスはその外交的手腕によって中米地域の紛争解決にリーダーシップを発揮し、ノーベル平和賞を受賞しました。近年ではパナマ、ハイチの非武装化の実現に重要

な役割を果たしており、国連で進められている極めて重要な ATT(武器貿易条約)においても同様です。

Q. コスタリカは確かに興味深い国かもしれないが、国家の規模が小さすぎて世界のモデル国家とはなれないのではないかと、という意見にはどう答えますか？

私は小規模で成し遂げられたことは、大規模であっても出来るのではないかと信じています。小国が外交手段、国際法を行使し、国際機関を有効に利用できるのであれば、大国ならどれほど有効に活用できることでしょうか。コスタリカの例で言えば、忘れてはならないのは、コスタリカが世界で最も危険な地域の一つである中米に位置しているということです。また、米国の政策によっていかに頻繁にコスタリカや周辺地域が不安定化されているかを考慮しなければなりません。1980年代にニカラグアのコントラ支援を行ったことや、今日の米国主導の麻薬戦争など、例を挙げれば数え切れません。

コスタリカの背後に米国がいるのでコスタリカの平和が保たれているのだろう、とよく言われますが、コスタリカの安全保障はヨーロッパ諸国との外交関係や米州機構、国連、国際司法裁判所に依るところが大きいと、歴史が証明しています。また、中南米の多くの国々と違い、コスタリカには米国の軍事基地はありません。一部のエリート層が時々、米軍基地をコスタリカに置くことを主張しますが、コスタリカの人々が許すはずがありません。

Q. なぜ映画にアニメーションは利用したのですか？

本作で説明するように、近代コスタリカにおいて1948年12月1日に軍隊が撤廃されたことは歴史的瞬間でした。しかし、コスタリカ国立公文書管理局は軍隊撤廃式典の写真を数枚しか保管していませんし、映像記録も残っていませんでした。アニメーションによってこの歴史的瞬間を再現出来たのです。幸運なことに、アーティストのミカ・ブルームによって切り絵による手作りのストップモーションアニメーション映像をデジタルで仕上げる事が出来ました。

マイケル・ドレリング共同監督 Q&A

Q.軍隊の撤廃はコスタリカの人々の生活水準の向上にどのような影響を与えたと思いますか？

それは大切な質問で、私たちがどのようにこの映画の展開を考えたかという本質に迫ります。社会学者にしてみれば、国が国民の公益に投資すれば、ある程度の成果が得られるのは当然のことと考えます。

第一に、政府が私益や軍事的利益ではなく公共のニーズに応えるなら、主権は国民にあるという意識と政府への信頼が増します。さらに選挙への参加率が上がり、より多くの政党が生まれ、富裕層や権力者による支配が少なくなります。逆もまた然りで、米国ではベトナム戦争を経て、ウォーターゲート事件が起こり、市民の政府への信頼は失墜しました。

次に、軍事支出の負担から解放され、コスタリカは高等教育や国民皆保険を含む公共政策に注力しました。対照的に米国について述べると、レーガン政権の下で、軍事費と国家の負債は急上昇し、それ以降ずっと米国民の高等教育やインフラ整備、医療、社会福祉がないがしろにされてきました。他の国々が貧困の削減や教育、医療に投資している間に、米国は軍事産業複合体に投資し続けたのです。軍事に力を注ぐ政府は国民の幸福をないがしろにしがちです。

Q.地球幸福度指数について言及していますが、詳しく教えてください。

コスタリカは再度、長寿と幸福、低エコロジカルフットプリントによって地球幸福度指数ランキングのトップに躍り出ました。世界の裕福な先進国と比べて、比較的予算や資源が少ないコスタリカの幸福度、教育、長寿のレベルが高いということは驚くべきことです。コスタリカの人々は、米国人と比較して遥かに幸福で、長寿ですが、米国市民の環境や経済に支払うコストに比べ、僅かなコストで生活をしています。コスタリカの平和主義には、自然への敬意も含まれています。地球幸福度指数（HPI）は長寿で幸福に生きるためには豊かな自然環境が必要だと説明しています。

Q.全ての国が軍隊を放棄できるわけではありませんが、軍事費を削減したら、長期的には何を達成できるでしょうか？

もし米国が数年以上にわたり軍事費を半減すれば、数千億ドルを他の目的に費やすことができるのです。良識ある市民が活発な議論をすることで、米国が強大な軍事力への更なる投資ではなく、次世代のための福祉へ投資することを望みます。比較社会科学において、高等教育や医療、子どもの養育、地域社会への投資が次世代をエンパワーメントすることにつながるとの研究成果が出ています。

このような投資がより良い未来のための平和に繋がるのです。

映画レビュー

20世紀半ば、ホセ・フィゲーレス・フェレールが非武装を「制度化」した。その後継者たちは、教育や医療、福祉を充実させることで、非武装を「文化」にまで昇華させた。

21世紀の現在、彼らは環境問題に取り組むことで、その文化をさらに発展させようとしている。

コスタリカ人たちは、非武装による平和という「文化」を共有している。あたかも、あらゆる日本人が桜を愛でるかのよう。フィゲーレスの政敵であった人たちさえもその例外ではない。

非武装は決して非現実的な夢想ではない。

かといって、平和はどこかから降ってくるものでもない。

平和とは、常に何かに脅かされる脆いものだからだ。

だからこそ、「自ら常に前に向かおうとする文化」が最大の武器になる。

長年の苦闘の末コスタリカ人たちがたどり着いたその境地は、マハトマ・ガンジーやマーチン・ルーサー・キング・Jrが出した結論と重なり合う。

文化とは、「誰にでも共有可能な無形物」だ。

だったら、私も、あなたも、その文化を共有できるのではないか。

それが世界中に広まれば、戦争も貧困もなくなるのではないか

この映画は、そういった希望のヒントを提供してくれる。

ー 足立力也 (『丸腰国家—軍隊を放棄したコスタリカの平和戦略—』著者)